20のリレートーク

市沢　涼子さん
福島市在住
（深谷出身）

◆自分を信じて

成人式を迎えた今年、私は社会人としての新生活をスタートさせました。就職先は福島市内の福祉施設です。

私が福祉の分野で働きたいと思い始めたのは、中学2年生の頃です。担任の先生から手話の本をお借りしたことがきっかけでした。その後、福祉関係の短大に進学し、たくさんのことを学びました。

しかし、卒業を目前にした頃に「福祉の分野で本当に働けるのかなあ…」と不安になることが多くありました。就職が決まってからもその不安は消えず、研修期間が目前に迫った頃には本当に不安でいっぱいでした。

4月から早くも3ヵ月が過ぎた今、その頃の不安でいっぱいだった自分にこう言ってあげたいです。

「そんなに不安にならなくても大丈夫。けっこうできるもんだよ!!」

今はこの施設に就職できて、本当によかったと思っています。毎日の仕事は楽しいし、利用者の皆さんとのお話も楽しみで仕方ありません。

あの頃の不安も、今ではほとんどありません。自信を持ち、自分のやりたかったことを信じて、これからも頑張って生きたいと思います。

こころのぽけっと

「一生の宝物」

昨年に続いて「合宿通学」が行われました。4、5、6年生が「やすらぎ」に泊まり、そこから学校へ通う事業です。

この事業は「親のありがたみがわかる事業」という名がついています。その目的はもちろんですが「子のありがたみ」もわかる事業だったと昨年の「ぽけっと」に書きました。今年は「親のありがたみがわかる…」の名の通りの光景に出会いました。

合宿中に親から郵便で手紙が届き、子供たちはそれを読んで、返事を書くという夜があります。飯樋小は34人と多数の参加でしたが、その2／3の子供が親からの手紙を読んでいるうちに、目からボロボロと涙をこぼしはじめました。シャツや手で涙を拭く子、嗚咽が止まらない子、目が痛くて書けない子などが続出でした。もちろん男子もです。「うるさい親が、こんなにも自分のことを思ってくれているのか」と思ったら泣けてきたと言うことでした。村の子供たちは何と純粋なんだろうと私も泣けてしまいました。

親の手紙によれば「家の方は大丈夫。でもさみしいです」「朝起きてますか？洗濯は大丈夫ですか？」「自分で何でもしなくてはならないので大変でしょう。頑張ってひと回り大きくなって下さいネ」「家にいる時と違い、がまんしなければならず大変でしょう」「困った人には手を貸してあげて」「お世話になった方に感謝の気持ちを忘れないよう…」などなど。

子供たちにとって親からのこの手紙はきっと「一生の宝物」なることでしょう。

平成15年6月30日

飯舘村長　菅野　典雄